

「星に願いを」

Yuki Shohei

「おはなしするね。」

私はね。

ハッピーエンドが好きだ。

だからこのお話は必ず。

たとえ共に長い道を歩くことになっても。

必ずハッピーエンドにしたい。

ちよつと険しいが一緒に登ってはくれないだろうか。

だから。勝手にだけれど。

あなたを。君を信用して。お話しをしたい。

大丈夫。勝手に信じたくせに勝手に裏切られたとか。

私は思わないから。

お話しをさせてください。

例えば。

教会に行つて、罪を告白しただけで許されるのなら。

私は死ぬまでそこで暮らそう。

許されたいという望みはきつと。

必要な感情なんだと思う。

だから無駄にはしないために

私は許される事よりも心の中で悩み続ける事にした。

そうして、自分じゃない誰かがいてくれたら。

それを話してみよう。

恐らく。

多分。

傲慢も貪欲も淫蕩も悲嘆も憤怒も怠惰も虚栄心も。

いつかはきつと。

許されないのだけれど、感覚は薄れていくだろう。

私はね。それを救いだというにはとても惜しい気がしてならない。  
私はどんな感覚も大事に大切にしたい。

それは自分だけに与えられた

あるいは自分だけが感じる事ができる。

難しい比喩が許されるのなら。対話の彼岸だからだ。

そこでは善悪では語ることでできない。

救いではないのだけれど。

徹底的で無慈悲でもあるのだけれど。

人だから感じる事ができる創造上での平穩がある。

信仰は悪いものではないと思う。

けれど世の中にはたくさんありすぎて。

わかっていた事だけれど。わからない事が続く。

今なお続いている。

それは。

——ああ。きつと。

とてもじゃないが私には解けないと思った。

とてもじゃないけれど、自分じゃ無理だと思った。

世の中には理不尽がある。

今。私が起こすものなら。すぐに謝ろう。

だつて私はできる事であるならば。

人に優しい人間になりたいからだ。

私は人を傷つけない人になりたい。

でも相当の精神苦を体験するはずだ。

だつて何もしない事が一番なんだから。

だから落ち着いて落ち着いて。言葉を探す。

少しでも自分が好きだからだ。

それでも。誰であつても人の幸せまで願つてもいいはずだ。

嫌がるであろう相手なら黙つてそう思っていればいいのだ。

自分とは相性が悪い人でも。  
ただ自分とだけ相性が悪いのだろうから。  
距離をとればいい。

でもね。

私はとても悲しい事だと思う。

自戒で済ますことはできない。

人を巻き込んでおいて自己完結させて終わりだなんて。

こんなの大した認識のズレだ。

また出会える可能性はあるんだから。

捨ててはいけないのだと思うから。

それにとっても同じだと思う。

忘れる事と実は何もできなかった事実。

だから事実を正しく知る事でしか人は救われないのだと思う。

物語は優しい。とてもとても優しい世界だ。

決して自分に危害を加える事はない。

けれど私たちは多分そこにいるような。

その世界に存在する人にはなれない。

そこには罪を背負う作業がない。

そうして道は作られたものをなぞるだけなんだとしても。

現存の人と話した時の安堵や安心とか

心に残った大切な記憶には絶対に勝てない。

その人の世界がいかに広大かというような。

想像でのみ理解できる。

その人を強く想う時みたいなの。

本当の優しい気持ちにはなれない。

自分を柔らかくして、柔らかくして。

辛い事や悲しい事を。

唯一自分の気持ちを自分の力で正しさを求め伝える事ができる、大切な言葉、を。

きつといつかの記憶で知っている。

人を信じる事。

そうして裏切られる事。  
この道を知っている。

行き場のない記憶を知っている。  
ただなにもない平原で。本当にただただ独りで頭を下げ歩いて歩く。

えて結果を出すためじゃない。

ただその人の事を考えて悩むための時間で歩く。  
いったい今までどれだけの絶望があっただろうか。

地獄とは何かを私は知っている。

井の中の蛙は。大海こそ知らなかったが。

その深さは知ることができそうだ。

これは私の言葉じゃないけれどね。

でもね。

わかるのだ。

私だけの感覚じゃないと。

私だけが見た絶望と地獄じゃないと。

なんとなく。

そう思うのだ。

それはそうじゃないと困るわけじゃなくて。

良い事しか起きない人生なんて。

あたり前のようにないのだからだ。

たくさんの人が物語が好きだ。

一緒に怒ったり泣いたり。笑ったり。喜んだりできる。

共有できるようにするために。

創る人が一生懸命だからだ。

本当の世界ではないけれど。

たとえ一時でも一緒に道を歩めるのなら。

それだけでは何もかもままならないのだけれど。

もちろん。

物語を創る人さえもままならないのだけれど。

そこにはほんのわずかな。  
わかり合える気持ちがある。

そうして。ほんの少しだけれど。

人間はそれぞれ全く別々の動物なんだけれど。  
それを頼りに。

共有の松明みたいにして。

夜を照らす。

そうして夜でも昼でも少しだけ一緒に居よう。

今それができているわけだから。

きつと私も。

あなたも。

君も。

どんな人でも。

一緒に過ごした事実だけでもいいから大切にしよう。

それは決められた箱庭だったけれど。

そうじゃない。

いるじゃないか。遠くの人が。未来の技術で。

光で。音で。近くにいるみたいに。

そうでなければ。

私はきつと人と暮らしてはいけないから。

少しだけおんなじ部分を。

とつてもとつても。

大切にして生きることにした。

これは私の場合だけれど。

おはよう。

おやすみなさい。

またね。

こんな簡単な挨拶だけを私たちは交わして。  
またそれぞれの道をゆく。

本当に続く。

どこかで大切にしていた。自分の道をゆく。

巡礼のような時間。

でもあなたと今まで一緒に使っていた松明は  
消さないで持つていくことにしたよ。

とても大切なものだし。証だと思っているから。

そうしてこのお話は終わる。

けれど。続く。

世界は私が歩き回れる庭ほど小さくないから。  
歩く。

また会えるといいね。

世界はこんなにも広いけれど。

なんの約束もしていないけれど。

また会えるような気がして。

私のお話は。

ここでおしまい。

この世界で。

また会えるとなんとなく。

そんなおかしな気持ちになつて。

それじゃあ。

またいつか。

どこかで。

「世界は美しく、美しくーダイアローグー」

うさぎとかめがある時かけっこで

山のとっぺんまで競争する事にしました。

うさぎは一瞬で遠くまで駆けていきました。

かめは地道に一步一步進みます。

うさぎはそりやなんたつて、機敏ですからね。

とてもすばしっこいのです。

かめは身体の関係でそんなに速く走る事ができません。

うさぎは昔の言い伝えであつた事を知っていたので

途中でいくつも休もうかなと思つたのですが

休まず山のとっぺんにつきました。

それはもうあつというまでした。

一方、かめも同じく昔の言い伝えを知っていたので、  
悔しいなと思ひながら。

わからない結果のために山のとっぺんまで進み続ける事にしました。

うさぎは山からの景色を少し一望したそのすぐあと、

かめのところへ走りました。

うさぎにとつてこの競争自体はとてもたやすい事でしたので  
やはりあつという間に亀のところにつきました。

かめは少しの声で言います。

「手を貸さないでほしい。」

うさぎも少しの言葉で応じます。

「そっだね。わかつた。」

うさぎとかめは何日かをかけて

あの山のとっぺんにつきました。

うさぎは言います。

「これを見せたかつた。」

かめは応えます。

「何度も見たくないと思った。けれど。君がいた。  
この景色を忘れたりしない。」

歴史の教訓というのは。

少しだけ大事だとわかっていればとても役に立つのです。

ある時には。

人間だと名乗る鶴が恩返しにきました。

おじいさんとおばあさんは子供ができたように喜びました。

鶴は、一つだけ約束をしました。

夜。何か音がしてもふすまをあけないでほしいと。

おじいさんとおばあさんは昔の言い伝えもありましたし  
何よりそんな事はどうでもいいくらい

人間の子供ができたと喜んでいましたから

決してふすまをあけませんでした。

季節が何度も何度も変わりました。

ある寒い日に鶴は何も言わずに一切を理解して

おじいさんとおばあさんに

小さなかすれる声で泣きながら

「ごめんなさい。」と云って

その翼で大きく空を舞っていきました。

おじいさんとおばあさんは

その声を同じく泣きながら聞いていましたが。

それでもふすまも玄関の扉もあけませんでした。

はじめからこうなるということはわかっていましたが

それでも嬉しかったから、喜んでいたから。

鶴の事をいつまでも人間だと心の底から信じていました。  
それはいつまでも続きました。

ある時です。

みんながおながが空くという夢を見たその次の日の学校でみんなが持つている食事を持ち合い分かち合いました。でもどうしてある時にそんな事が起きたかいつまでもわかりませんでした。

いろんな神様はなぜか秘密が好きになり、それを信じる人達も秘密が好きになったり。いつの時代もどこにでも仙人のような人がいて自分の役割を熟知したため。

ひっそり生きてひっそり死んで。  
神様や仙人にとってはそれでよかったです。

ああ、世界は美しくなる。

美しくなればいい。  
もつともつと四季を告げる鳥も花も木々も。  
とてもとても美しく。

海は穏やかにおしてはかえすゆりかごで。  
その浜辺で恋人どうしはただ静かに聞いているだけ。

なんだ。

ああ、そうか。  
救いも奇蹟もなにもかもつまっていた。

一人に一つだけ正解がわかつていればそれでよかつたんじゃないか。  
科学の力だけで世界はこんなに美しくはなれないが  
私達には科学が必要で。優劣なく。

火が暖かければ暖かいねと言い合える兄弟がいればよく。  
一人であつてもそれはどうであれ。  
独りになろうとも孤独が来た事を受け入れる世界もあり。  
あるとき目が覚めたら世界あたり一面が黄金に輝いて。  
宙を浮く自分に驚いて。

いつか、いつか。

誰もが自分はどんな形であれど

眠くて眠くてしかたがなくなる事がわかって。

だからそれを早める事も遅らせる事も良しとせず生きる。

これをきつと人生と言って。

なにもがない時に悲しいというのは私も悲しいとか。

そういう気持ちと同じであるとか。

ほんの少しのおんなじところを知っているから。

人間は他の人間をおんなじわかでとらえて

仲良くできたりその逆もあつたりして。

美しくあれと願う気持ちが少しでも星に届けばいい。

どの星であれども届けばいい。

向こうの星の推定人類も。

きつとそう思ってくれている事だろうとなんとなく思つて。

いつも、いつも、瞬きの間になくなつてしまふから気がつかなかった。

ああ、本当にいつも、いつも。

世界は始まりから終わりまで美しく、美しく。

生きる時間も年老いていく過程も美しく、美しく。